

## ■ワークショップ 2■

ミニシンポジウム 【対話の余白から；〈在野の市民カフェ〉の健全な機能とはなにか？】

キーワード： 〈在野の市民カフェ〉、 〈教育の外部〉と〈教えない教育〉、 〈一回性の共同態〉

芹沢幸雄（さろん）

構成： 基調報告 + パネルセッション + 会場との対話・質疑応答

基調報告： 芹沢幸雄（さろん）

パネリスト： 島内明文（東京大学大学院医学系研究科医療倫理学分野特任研究員、「コミュニケーション・アゴラ」元主宰）ほか

現在、哲学プラクティス実践者の多くが学校関係者・研究者であり、教育機関で哲学（哲学教育）を専門的に研究・学習した背景を持っていると考えられる。一方で、専門的スキルや教育的な取り組み、研究活動を背景に持たない在野の市民たちが、〈哲学対話〉という独立した営みに触れたことが契機となり、〈哲学カフェ〉や〈哲学対話〉を実践している。こうした非専門家による団体を、仮に〈在野の市民カフェ〉（さろんも含まれる）と呼ぶ。

哲学プラクティスの多様な展開の中に、〈在野の市民カフェ〉の活動を位置づけることの積極的な意義はどこにあるか。〈在野の市民カフェ〉という視点から、こうした活動が示す問題の射程について、特に次の2点を挙げて、パネリストの知見を交えて広く検討したい。哲学プラクティスの実践が固有の場を持ち、より公共に開かれた持続的な活動であるために、〈在野の市民カフェ〉が健全かつ安全に機能する正当な根拠をどのように検討することができるだろうか――。

### 1、〈教育の外部〉と〈教えない教育〉

〈在野の市民カフェ〉という場は、主宰者と参加者が、一般的な教育機関や制度から切り離されているという意味で〈教育の外部〉である一方、参加者からの教育への希求が顕在化する場でもあり、〈教育外部での教育〉あるいは〈教えない教育〉とでもいえるべき問題系を意識する多義的な場でもある。これに対し〈在野の市民カフェ〉が実践を通じてとることのできる正しさとはなんだろうか？

### 2、〈無担保の信頼〉と、〈一回性の共同態〉における対話のあり方

〈在野の市民カフェ〉の活動は在野の市民との〈無担保の信頼〉の上で営まれているのが常態である。同時に、〈一回性の共同態〉である場において、参加者の参加動機はどのように主題化され、どう哲学対話の実践に表れてくるのが理想的だと考えられるだろうか。たとえば有意義なあり方の一つと思われる「答えの出ない問い」を「答えの出る問い」へと仕立て直すような哲学対話の実践は、〈一回性の共同態〉においては、どのような実践的モデルとして構想できるだろうか？

（せりざわ・さちお） 2010年にスタートした任意活動団体さろんのスタッフ。哲学カフェの「さろん哲学」、読書会「朝さろん」、ワークショップ「さろん工房」、インキュベート「さろんラボ」を通じて哲学対話を実践している。会の最新情報はメールニュースにて配信中。

<http://salon-public.com/>